

「孤独死」問題について ～「孤立する」怖さと人と「つながる」大切さ～

今月は 社会福祉士 澁谷 昌広 です

少子高齢化の進行により、単身高齢者が増え、それに伴い「孤独死」という悲しい事例をテレビや新聞等で見かけます。

「孤独死」とは、一般的に一人暮らしの人が突発的な疾病等によって、特に重篤化しても助けを呼べずに誰にも看取られることなく亡くなることを指し、中には相当の時間を経て発見される場合もあります。

孤独死に多い事例



病気等による身体虚弱から閉じこもりとなり近所付き合い等、地域とのつながりが希薄になり、突発的な病気の発症が原因で倒れるが、誰にも気づかれないまま亡くなった事例



本人自らが、孤立無縁主義で他者とのつながりを絶って生活していたが、誰かが気づいたころには亡くなっていた事例



認知症や精神疾患等の影響により、自分に対するリスクの認識が乏しく必要な支援を拒否し、自ら SOS 発信が出来ず、自己放任（セルフネグレクト）状態で亡くなった事例



元気で生活していた方が突発的な病気により急変して倒れ、結果として亡くなってしまうが、発見されるまで時間が経過した事例
……等。

知っていますか？地域の見守りネットワーク！

「孤独死」の発生リスクは、地域の高齢化に伴い高くなる傾向があり、自治体によって様々な防止に向けた取り組みを行っています。

本町では、「高齢者見守りネットワーク事業」として、地域包括支援センターが中心となり、町内会、民生委員、警察、消防や、町と見守り協定を結んでいる各種企業等と連携し、日常生活の異常を早期に発見し対応することを目的に活動しています。



道新檜山会との見守り協定



コープさっぽろとの見守り協定



うみまち信金との見守り協定



日本郵政との見守り協定

実際、この事業によって、倒れている高齢者等を発見し、早期に対応することで一命を取り留めた事例もこれまでに数件ありました。

「孤独死」の防止に向けた取り組みを行う上では、本人の支援拒否や個人情報の取り扱い等、なかなか難しい課題はありますが、これまでの支援の体験から「人と「顔の見えるつながり」を持つことの大切さ」を実感しています。

「孤独死」という悲しい事件が起きないために、孤立せずお互いに「顔の見えるつながり」から助け合い・支え合っていくことが大切なことではないかと思います。